



佐高 信
経済評論家

年金問題の追及に及び腰の政府とメディア 求められる歴代社保庁長官と官僚の断罪

『SIGHT』という季刊の雑誌がある。これまで度々呼ばれたが、今度は年金問題で、ウオッチャーとして名高い岩瀬達哉と対談せよという。二〇〇八年夏号に載ったそれでは、ずいぶんと彼に蒙を啓かれた。

まず、なぜ日本に年金ができたのか。昭和一六年に当時の厚生省の年金課長、花澤武夫が世界の一流国たる条件として年金をつくりたいと思った。しかし、大蔵省も軍部も反対する。この戦争で負けたら年金も何も無いぞと言っているのである。それを花澤はこつ説得した。「集めた年金を支払うのは四〇年後です。そ

昭和三四年に行政監察局が記録がズサンだと注意したら、厚生官僚は「大変だからやらない」「将来、年金を払う時に本人から聞いて記録を直す」と言いながら、自分の年金はまちがっているのではないかと行って来た人に、「それじゃ、証拠を持って来なさい」と行って追いついたという。

岩瀬によれば「できたときから、運営も支払いもめちゃくちゃのひどい制度」なのである。国民年金からも抜きをやってきたのだが、なるほどと半面頷きつつ、半面呆れたのは役人は自分たちの共済年金に関してはちゃん

の間は使えるじゃないですか」

つまりは最初から払う気はなかったということである。これはドイツのヒットラー政権を参考にしたのだとか。ヒットラーはこれを使ってアウトバーンをつくったり、ヒットラー・ユングントの養成をしたりしていたという。また、花澤は自分たちもその力ネを使ったために、厚生年金法の中に年金掛け金（保険料）を福祉施設に使えるという条文を入れ、いわゆる中抜きを続けてきた。ドイツは敗戦でそれがストップし、新しい制度を立ち上げたが、日本はそのままだ。

と運営させているところというのである。

逆に言えば、だから年金の一元化ができないのだから。

岩瀬が国家公務員共済年金に取材に行った時、当時、厚生年金はグリーンピアをつくったり、無駄使いの限りを尽くしていたのだが、国共済はどつなのかと尋ねたら、大蔵省主計局の共済課長が、

「国共済は同じような福祉施設を持っていますが、別途、福祉掛金というものを取っていて、年金には一切手をつけてません」と答えたという。

それで、厚生年金や国民年金は年金を使っているんですよと言ったら、彼は、

「えーっ、」
と驚き、

「そんなことをしたら加入者は不安になるじゃありませんか。本当にやってるんですか」と反応した。

この感覚である。自分たちなら不安でやれないことを官僚は国民に対してはやるのである。岩瀬はこつ提案する。

「民主党の長妻さんが、責任問題をはっきりさせるために歴代の社会保険庁長官を呼んで国会で喚問しようと言ったんですが、自民党が反対したんです。自民党だってさんざん痛い目にあっただまされてきているんだから、社保庁長官呼んで責任問題をはっきりさせたほうがいいと思っんですよ。でも、国会で喚問をやってしまうと、政府として官僚を管理できていなかった責任を追及されたら困る。だから、かばってしまうんですね。官僚はかばわれることがわかってるから、多少のことばやっても平気だろうと考える」

この悪循環を断たなければならぬのに、いま、政府与党はすべてを労働組合のせいにして、国民の溜飲を下げさせ、それで逃げようとしている。

「もちろん組合も批判されないといけないでしょうが、それ以上に歴代長官および厚生省の官僚たちの責任を問わないといけない」
こんな明快な論断が、なぜ、マスメディアではできないのだろうか。